

書 評

J. ボンスフォード 著 藤井正子 訳

外傷性脳損傷後のリハビリテーション—毎日の適応生活のために

大橋 正洋 (神奈川リハビリテーション病院)

外傷性脳損傷者には交通事故を原因とする若年者が多く、症状は多彩である。このため障害の評価が困難で、提供すべきプログラムも医療から福祉、労働まで広範囲でなければならない。麻痺や失調などの運動機能障害、視力や聴力などの感覚機能障害も問題となるが、これらの人々の社会復帰を阻害する大きな要因は認知および心理社会的障害である。また外傷を受けた本人だけでなく、共に生活する家族にも深刻な問題が及ぶ。

このような外傷性脳損傷者の特殊な障害像は、わが国でも徐々に認知されてきた。しかし、これらの人々が必要とする包括的で継続的なアプローチを提供できるわが国の施設は少ない。さらにリハビリテーションをどのように行うべきか、その指針を示すわが国で刊行された教科書はほとんどない。

訳者は、情報をやむなく海外に求めるうち、メルボルンのベテスダ病院脳外傷リハビリテーションチームが12年間の経験をまとめた本書にめぐりあった。訳者によると、本書の特徴は実践的で、研

究を視野に入れており、参考文献が多く示されていることだという。本書の原題は、Traumatic Brain Injury Rehabilitation for Everyday Adaptive Livingである。この頭文字の一部をつなげるとREALとなる。実践的という理由は、外傷性脳損傷者が障害を持って日々の生活に適応するための現実的な方策を、豊富な事例と共に提示しているところであろう。原著者は、臨床心理士であり、認知や行動障害を持つ人々への具体的な対応として行動変容法に重きを置いている。障害の評価方法などは、多くの文献で見慣れた米国のものだけではなく、ベテスダ病院独自の考え方も示されている。訳語は、当事者や一般の読者を意識したためか、医学書で多く使われる障害評価という用語が障害査定となっている部分などがある。しかし本書には、冒頭にかかげた外傷性脳損傷者の特殊な問題点や現実的な対応方法について、必要な情報がきちんと示されている。

(A5 頁345 6,800円+税 2000, 西村書店 刊)